

薄幸の小姓⁽¹⁾

トリスタン・レルミット⁽²⁾
野池恵子訳

1. 薄幸の小姓の序章

親愛なるティラント⁽³⁾、私もよくわかっています、私がいくら抵抗してみたところで無駄なことだと、どうしてもあなたは私の生涯がどうだったか、これまでの運命の有りさまがいかにようだったかを知りたいというのですから。私とて知りたいという欲望であなたをますます激しく焦らそうと考えてはいないのです。それでも、あなたの望みをかなえようと決意するには、かなりの苦痛が伴います。一体どんな風に思い切りをつけ、こんなにも取るにたらない冒険を白日のもとにさらそうというのでしょうか。どういう風にしたら私にあれ程の辛酸をなめさせた事柄が、あなたに多少なりとも喜びを感じさせることができるのでしょうか。又、どうしたら、私には耐え難かったのに、あなたには読んで快いということが可能となるのでしょうか。それに人は一体私の軽率さを何というでしょう、私はあえて自分で自分の生涯を、品も生氣もないような文体で書き記そうというのですから、それも、自分で書いた高貴で力強い随想録に自身を登場させたという理由で、今世紀の最も傑出した人物の一人を⁽⁴⁾、不遜にも人々が非難しているのですから。確かにその驚異の天才は自己を描くことでしばしば自分に有利なように話を進めています。それに対し私の言えることは、私には自賛すべきものが何もないため、それをこの作品で嘆こうというだけなのだ、ということです。私は今までに書いて評判になった詩においても、そこに自分が英雄となって登場したいと思ったことは一度たりともありません。私はある嘆かわしい話を書き記そうというのであり、そこに私が姿を現すとしても、それは憐憫の対象として、諸々の情熱や星回りや運命の玩弄物としてでしかありません⁽⁵⁾。話はここでは少しもその文飾を荘厳に輝かしはしません。真実は、身にまとうものが余りにも少ないために、むきだし同然だと人は言うかもしれません。この作品は実物以上の出来の絵画ではなく、嘆かわしい現実の忠実なる模写なのであり、鏡に映し出された像のようなものなのです。従って、私は多くの理由があって、あなたがこれを読みながら、私の余りの天真爛漫振りにいくばくかの嫌悪感を催すのではないかと恐れるのです。通常、人生で起こる事件はありふれているか、あるいは稀であるかのいずれかであり、作りあげた話を語ることの方が、真実相互の関係をお話するよりも恐らく魅力はずっと大きいでしょう。しかしながら、私の生涯は今まで行く手を遮られることが甚だしく多く、私の旅や恋愛は、余りにも多くの障害に充ち満ちていたので、その波乱万丈の一面があるいはあなたのお気に入るかもしれません⁽⁶⁾。私は私の話全体を小さな章に区分けしましたが、それは話が長すぎてあなたがおあきにな

ってはいけない、と恐れただけであり、又、あなたが私を許せないとお感じになれば、どこでも簡単に私をうち捨てておけるようにと配慮したためであります。

2. 薄幸の小姓の家柄と出生。

私はかなり良い家⁽⁷⁾の出で、偉大な雄弁家にして偉大な大尉でもあった、ペリクレスの再来ともいえるある著名なる貴族の姓と紋章を持っております。今から五百年以上も昔のことになりますが、その人物は聖地パレスチナで起きた戦争を味方に有利に展開させた重要な人物の一人だったことから、歴史的に多くの讃辞を得ています。そして、私どもの家には昔は多大な名誉と財産があったのだと申しあげることができましょう。しかしながら、栄枯盛衰はあらゆることに永続的に認められ、神の摂理の密かで正当なる法則に従い、ささやかな財産は増大し、莫大な財産は減少するものですが、私も生まれて以来、先祖の隆盛がいかにして消滅していったかを目のあたりにしました。我々の家は財産を二つに分割され、その一方は九人の子供に渡されましたが、そのことで、家の権勢は大きく減じることになりました。そのうえ、私の父が十七歳の折から大きな刑事訴訟⁽⁸⁾に巻き込まれ、それで家の崩壊はほとんど決定的になってしまいました。その事件は父にとっては手痛い出費となり、青春の真っ直中で勇気をおおいに発揮し得なかったのは、その不幸が父の命取りになったからなのであります。父のこの事件については詳述はいたしますまい。余りにも悲痛で長く、ここに記そうと思えば波乱万丈の青年貴族の話をしてしまいそうになり、薄幸の小姓の身に起きた出来事を書くことにはならなくなってしまいましたから。ただその件については、今はこうお話ししておけば充分でしょう、当時最も偉大だった大尉の一人と⁽⁹⁾、この世で一番美しく優れた女性が⁽¹⁰⁾、父を助けるために尽力したと、そして、父の友人達のはからいで、奇跡的に国王の恩赦が得られ、それでかくも危険な事件から名誉を保ちつつ身をひけたのだと。

父が、生まれも良く多くの手柄も立てたある老貴族⁽¹¹⁾と知り合いになったのは、そんな状況の中ででしたが、その人物は父を好青年と思い、又、話をしている楽しいと感じたために、娘の婿にしたいと申し出たのです、しかも父がその貴族の住居からはひどく隔たった所の出であり、又、父の経済状態の悪さも知らないにもかかわらず。⁽¹²⁾ 彼にとって話をまとめるのは、難しくはありませんでした。友人として頼もしく、心配りも行き届いた老貴族は、父の世話を実に良くしてやり、愛情をたっぷりしめたために、父もほど無く彼の娘と結婚をしようと決意しましたが、すると即刻貴族は父を自国に連れて行き、そこで私が生まれることになるのでした。父が身を落ち着けて2、3年後に私はこの世に生まれ出ましたが、私の天宮図の位置を人念に調べていた人々は、私は水星の配置がかなりよく、太陽の方はいくらか良いことに気付きました。金星が強力で、事実そのせいで私は恋に陥りやすかったものでした、又、そのことから私の失寵がしばしば生じもいたしました。私が思いますには、性格は天体の最初の影響をそのまま受け、以後変わり難いものとなるのです、その性格は決して無理強いしてはこないのですが、少なくとも絶えずある方向にむけるものなのです。賢者ならこの神の暴力を征服することができると言われております。しかし、それには真の英知を備えていることも必要であり、

それ程の人にはめったにはお目にかかれるものではありません。魂の気高さが、哲学に裏打ちされていてこそ、我々に生まれついている敵に対し何時も闘いを優勢のうちに進めることができるのです、ヒュドラのように絶えず増殖し、しばしば敗北を掃すごとに一層強くなる敵に対して。聖人こそこの例にあてはまる人間と言えましょう。彼らの魂は最早天の高みしかみつめていないというのに、危険な誘惑が彼等を日夜攻めたてているのですから。又、その誘惑に激しい闘いの末に打ち勝っても、それだけで安心できるというわけでは全くないのです。彼らの功德をより大きなものにするために、神は悪魔がかかわりあいになることを許し、その為に彼らは自分では身に覚えのない動機から、悪しきことを何時も企ててしまうのです。

3. 薄幸の小姓の幼年時代と知能の高さ

私がまだ三歳になるかならないかの時、母方の祖母⁽¹³⁾が娘に会いに来ました。そして血を分けた者の熱烈で自然な愛情に導かれ、私を手許で育てたいと言いつきました。そうした訳で私は次第に故郷を忘れて行くことになり、それまでは気にとめるものと言ったら田舎の木々や静寂でしかありませんでしたのに、世界でも最も有名な都会の多様な装飾やら喧噪やらを注意して眺めるようになったのです。皆の話では、この頃の私はかなり才気煥発だったようで、周りの者が私の質問にいくら快く丁寧に答えてやっても、私の好奇心は満足するすべを知らなかった模様です。私の目前に一団となって現れる実に多様な物事も、決して私の精神の活動を満たしはしませんでした。私は、この年頃の子供が普通吸収することよりは、もっとしっかりしたことと関わっていたかったのです。あの世のことや私達の宗教の玄義に関することについても熱心に知識を得ようとさえしていました。私の親類筋にあたるある司教は⁽¹⁴⁾、皆が私について言っていることを聞き常々驚嘆しておりましたが、ある日のこと、私を愛撫しながら、地獄の形態について私のした質問を揶揄しているうちに、私がこれほど灯のともされているところに闇の世界があろう筈がないと自分なりに説明するに及んで驚愕の度合いをますます強くしていきました。申し上げておきますが、私は四才にならないうちに文字が読めるようになっておりました、そして小説を読むことに楽しみを見出し、上機嫌で祖母や祖父に話して聞かせていましたが、彼らは私を愚にもつかないそんな読書をやめさせようとし、ラテン語の初歩を習わせるために私を学校に送り込みました。私は勉強に精を出しましたが、いっこうに身が入りませんでした。多くのことを学びましたが、ひどく不味い肉を食べているよううんざりした気分で行ったため、なんの役にも立ちませんでした。それまで楽しいことを余りにも自分勝手に味わってこられたので、もっと有益で難しいことを自分に培うよう強制されると、やる気がなくなってしまったのです。私は学習しましたがそれは鞭が怖かったからなのです。強制されて擲んだ宝物はあっという間に失いましたし、又、強いられなければ取り戻せもしませんでした。私は、強制されたものに愛情を持つことは金輪際ありませんでした。

4. いかにして小姓は王子に奉公することになったか。

勉強すると憂鬱になるばかりで、もう耐えられなくなって来ていたところに、ある幸運が訪れ、私の生活は様変わりいたしました。私の父は戦争中、最も偉大にしてかつ名高い国王の一人⁽¹⁵⁾に仕える榮譽を得ていましたが、この立派で王者に似つかわしい人物は、皆に善行を施そうという情熱以上に強い情熱は持たず、又、記憶力は鈍ることがなかったとみえ、ある日私の父が忠実に仕えてくれていたことを再び思いだされ、気高くも感謝の念を示さんと父に子供がいるかどうかお尋ねになった上で、私を王のもとにさしだすようにお命じになられ、私を王のお子様の一人とともに養育したいのだとはっきりおっしゃったのでした。祖母はその嬉しい知らせに歓喜し、有頂天になってこの素晴らしい機会のために私の衣装代を負担してくれました。こうして私は父と、美德の誉れ高く権威も絶大な私の母方の叔父⁽¹⁶⁾に付き添われて、光栄にも国王様達に謁見しに参りました。私は招じ入れられた宮殿の華麗さ、美しさに眩惑されましたが、特に私が仕えることになっていた二人の神にも似た人物⁽¹⁷⁾の輝かしさには目が眩んでしまいました。父王の方は私を美しいと思われ、私を特に愛撫して下さいました。御子息の方は私を快く受け入れ迎えて下さいました。

私達は、年は殆ど変わらず、背丈も同じでした。しかし王子の美しさには目をみはるものがあり、気立ても優しくったおかげでその頃から将来が高く属望されていて、高い美德故にこれは充分すぎる位果たされていきました。初めてお目にかかった時に、私の心にあの方の御立派さが強くはっきりと刻みこまれたのです。素晴らしくのびやかな方で、私にあふれるような愛情を注いで下さいました、それが私の献身への密かな感謝の念からでたものか、自然に湧きでた愛情だったかわかりませんが。私はお仕え始めるとすぐに、役目に専念しきったと言えるでしょう。主人の完璧さが、奉公人をがんじがらめにするくびきとなったのです。私は主人の影のように、何時もお側にはべっておりました。主人の目がおさめになればすぐ御前に参り、又、眠くて目蓋をお閉じになるまで、主人から目を放しはいたしませんでした。私は主人の日課の観客であり、模倣者でもありました。お祈りに、勉強に、気晴らしに、私はお供を欠かしはしませんでした。私の主人は、決して術学者を教師にはいたしませんでした。主人に学問を施したのは、実に礼儀の正しいある文人で⁽¹⁸⁾、歴史と倫理の最も重要な事柄を、遊ばせながら学ばせたのでした。この偉大なる人物は若者を育てる術を完璧に心得てい、私の親類の者に教育を与えたことで、それを既に証明しておりました。恐らく、今世紀最高の雄弁にして学識のある人物の一人だと申しあげても、誰も異議をさしはさみはしません。この学者は私の教育にもことのほか心をくだき、私の親類の者に負った恩義に当然の如くに報いてくれました。しかし、主たる弟子の勉学の進展に心血を注いでいましたから、私にはそれほど丁寧には注意の目をむけることができませんでした。師は、私の主人に教えることは全て私にも教えてくれ、そのお蔭で私も、豊かな知識や美德を得ることができました。しかし、それだけでは私への配慮は充分たりえず、私が城内に数多くいた放縦な若者達の示す悪い手本を目にし、真似するのを避けさせることは出来ませんでした。私が幸せになるためには、この師と同じ位立派な教師が私に全霊を注ぎ、始終そばで私を見守っている必要があったのかもしれない。若者は放埒に傾きがちで、悪い習慣にいと簡単に染まるため、墮落するのに何が必要だなどということはないのです。それは良い影響にしる悪い影響にしるこれか

ら受けようとする純粹無垢な時代にいることであり、高潔なものよりも悪徳の影響を遥かに強く受ける年頃なのです。不品行に陥る機会が多いにもかかわらず、良俗で身を固めている大人もいることはいます。しかし、子供達が悪い仲間と共にいて、なお純粹さを汚れないまま保持していても、それは、奇跡でしかないのです。従って私も間もなく宮廷で陰謀を目にすることになりましたし、ちょっとした不品行な生活に身を染めることにもなっていくのでした。

5. 薄幸の小姓と、同じ家の別の小姓との間の類似性について、彼との友情は私には有害でした。仲間としては私には主人のもとで私と同じ立場にあり、私と同じ様に皆から世話を受けていた男が⁽¹⁹⁾一人しかいませんでした。名門の出の少年で、生まれの良さをそこここに感じさせていました。相手の示す真心や愛情のせいもあり、私の方もこの仲間を敬愛してやみませんでした。私達は一緒に、妬みを抱くこともなく、主人の寵を得ようと知恵をめぐらせたものでした。私の方が記憶力が良くて彼は嫉みませんでしたし、私よりも彼の方が判断力が優れていても、私にとっては不幸なことでした。それで自分の競争心がかきたてられはしませんでした。勉強の時間に、私は彼に忘れてしまったことを思い出させようとして、よくそっと耳打ちしたものでした。一方、この仲間の方は、どんな時でも義務については私に忠告を与えることができたのです。それは大変賢い少年でしたので、かれと共にいれば私が墮落するなどということはあり得ませんでした。しかし、これも運命のめぐりあわせでしょうか、私は宮廷きっての悪で、ならず者の小姓と知りあいになってしまいました。それは、私についた悪霊の手先で、私をそそのかし、破滅させるために遣わされたのだと思いましたが、又、それだけの理由も私にはありました。人間に変装したその悪魔は、私が平穩に勉強するのを技巧を弄して中断させる方法を心得ていました。魂を地獄落ちにしかないある遊びの巧妙なルールを、密かに私に教えたのです。彼こそがまず最初にさいころとカードの使い方を私に教えたのですし、又、彼こそが私の純な心につけこみ、なけなしの所持金を取り上げた上、損失を取り戻したいという望みを激しくかきたてたのですし、虚しくも狂おしい期待を抱かせて挑発し、不幸の先へ先へと私を踏み込ませたのも彼なのでした。その種の情熱は、植え付けられるとまもなく、私が勉学に対して持っていた情熱と同じ位にまで大きく成長してしまい、それ以降は、私の不意を襲った者は誰でも、私が筆入れにはさいころを、本の間にはカードを隠し持っているのに気付くようになりました。この無軌道振りは更に悪化さえして行き、私は遊びのため勉強に必要な物を処分するようになり、又、ページをくる習慣のあった書物が一冊もなくなってしまって、手もとに残ったのはカードだけとなりました。師が私の放蕩に気付くのに時間はかかりませんでした。師には私をそこから引き出す力はありませんでした。師はこのことについては、鞭と教訓を虚しくふりかざしただけでした、私の悪徳は余りにも深いところに根付いてしまっていたのです。涙を目に浮かべてもう遊びはしめんと何度も私は約束しましたが、師の視界から姿を消すと、もうさいころ三つと、カード一組を手を持っていました。私はますます度し難い者となって行きましたが、それはかくも年少にして身につけていた機知のお蔭で、良家に多くの友人を得て、その彼等が私の更生の妨げとなったためでありました。過ちを犯していると

ころを不意に見られたと思うや否や、又、師に何か報告されるのではないかと恐れるとすぐに、私はこれらの有力な人物達の懐に飛び込み、彼等の所を、安全な隠れ家としてしまいました。私が知り合いになる栄誉を得た多くの王子達は始終私の許しを師から取りつけてくれたのです。そしてこれらの人々のとりなしを確保してからは、私は罰せられずに罪を犯せたらと、期待するようになりました。私に有利に働く筈だった力が、哀れにも私の破滅にむけて如何に用いられたかを、又、自分の長所に助けられ、私が、如何にして悪の中で自分自身を保つ手段を見出したかを、ちょっとお考えになって下さい。尤も、賭博好きになったために、著名な文学作品を読む苦痛に悩まされることがなくなりました。快楽は勉強で得られなくても、他のあちこちに見出せ、自分の勉強を繰り返し反復するかわりに、私はひたすら軽い小説をよみふけり、それを人に話して聞かせていました。私の記憶は驚くべきものでしたが、全くろくでもない作品しか詰まっていない貯蔵庫でした。私は小説や寓話の生き字引だったのです。暇な人ならどんな人の耳でも、うっとり聞き惚れさせることが私にはできました。種々雑多な人間にあわせたあらゆる種類の話と、あらゆる年代の人に向く娯楽を、用意していました。ホメロス、オウィディウスの物語から、イソップやロバの皮の話まで、私達の知っている話ならどれでも楽しげに、よどみなく語り聞かせることができました。

宮廷が王家所有のどこかの家に滞在する時、若い王子達は皆隣同志の部屋で寝起きをしました。私が一番自由に彼等の所に行き行って話が出来たのは、この期間でした。よく、誰かが気分が悪くなると、師を介して、私に暇つぶしの相手をしてくれるよう、話を聞きながら眠らせてくれるよう、頼んできました。彼等の健康は極めて大切なものでしたから、そんな時は私が時間をいくら無駄に使おうと誰も気にかけはしませんでしたし、私の方も大喜びで無駄にしたのです。その時のことでした、私がある貴族の気晴らしに必要だと思い、ある行為を大胆にも企てたのは。尤もそれは自分の安らぎには必要ありませんでしたが。私には確かな仲裁人がいましたので、確固とした足取りで、私の仲間の一人と賭をしに行き、けんかをしたのでした。私の師は、私のやった悪戯にたいし、時に全責任を負い、その為に私は12回以上も鞭で打たれたことがありました。が、いずれにしろ、私に必要なものは、一滴か二滴の涙、それも恐ろしくて流したものと、綺羅星のような王子達に対してなした哀れっぽい懇願だけでした。一人、極めて有力な王子がいたのを私は思い出します、生きていた時は私のためによく許しを乞うてくれたのですが、死後も、その王子の生前を考慮して、皆はしばしば私を許してくれたものでした。

6. 薄幸の小姓が仕えた主人の一人の痛ましい死

王子達の中に輝くあの若き太陽は⁽²⁰⁾、まだ人生の光輝のどれをも手にしてはいませんでしたが、神々しいほどの美点のために、非常に大きな希望を皆に抱かせ、比類なき驚異となっていました。顔が極めてお美しかったのですが、それ以上に精神面、判断力にすぐれ、殆ど何時も道理にかなった良識のあることをおっしゃいましたので、そばにいる者達を賛美の念でうっとりさせしていました。多くの知が集められ、そのうるわしい生涯、稲妻のように通り過ぎ輝かしくもはかなかった生涯が、書き記

されました。王子の才知に富む言葉には、ここでは全く触れないことにしましょう、それらは人々の尊敬を集めた人間の例に漏れず数多く残っておりますし、記憶にとどめておく価値は充分あります。ただここでは、王子のすぐ憐れみを感じてしまう本性がよく表れた、子供らしい言葉を記すことにいたしましょう。ある晩少々王子の気分がすぐれなかった時のことでした、お付きの女性で、賢く慎重、又、その美德で名の知れた方が、私を王子のもとにつかわし、私の話で王子に何時間か気晴らしをしていただいたらどうかと考えついたのです。話を聞き手に分かるものにしようと、私はイソップ物語に助けを求めました。するとその日以降王子は、気晴らしをするなら他の遊びでも同じように感動を得られた筈なのに、私の話でなくては満足しなくなりました。健康上の理由で王子が数日間休養しなければならなくなったために、私は何回かお話をししてさしあげることができました。我慢強く、好奇心で胸をふくらませながら、王子は、動物が口をきいたり考えたりする話を沢山お聞きになり、私もそろそろ疲れてきた頃のこと、話は流れる泉の水を飲んでいて狼と小羊の冒険に移りました。私は王子に語りました、小羊より下流で水を飲んでいて狼が、小羊のところへやってきて、水を濁したのは腹黒い悪意があつてのことだろうととがめました、という風に。そうして、それがいいがかりでしかない、狼にへりくだって、控え目に言葉を返すおとなしい動物の様子をお話してさしあげました。その後狼は、罪なき動物をむさぼり食おうとして今のとは別のいいがかりを見つけ出し、二年前のことを覚えていると言つて、小羊をとがめます。羊小屋が襲われた時、小羊は別の何匹かと真先に鳴き、羊飼を起こしたため、それで自分のじいさん狼が殴り殺されたと責めたのでした。そして私はこう話を続けました、小羊がそんな話は本当である筈がない、自分はまだ生まれて二カ月しかたっていないのだから、と答えた。ここで王子は話がどう進むか見越したのでしょうか、ベットの外にあった可愛らしい両腕を急に引き寄せ、おびえた声で、目からは涙を流さんばかりにして、おっしゃったのです。

「ああ、よくわかるよ、お前は狼が小羊を食べたと言うのだろう。ねえ、お願いだから、食べなかったと言っておくれよ。」

この小羊を憐れむ言葉には、実に愛情がこめられ、耳に快く響いた為、王子は見守っていた人達全てを賛嘆の念で魅了してしまいました。私も痛く心を動かされ、その幼い驚異の人の意にさうよう、私の話の結末をかえてしまいました。それを大変巧くやったので他の人には見抜けないほどでした。こうして栄誉を得ると、私は、ことあれば必ず、王家という避難場所にまず助けを求めて駆け込み、私の利益になることをしてもらうための、つまり皆に私を痛めつけないようにしてもらうための理由を説明したのです。それで王子の断固とした命令が出され、非常に良い結果が私にもたらされました、幼いとはいえ王子は、王家の出だからと言うばかりではなく、それ以上に神々しいまでの美点があったために、人から偉大だと言われたのでした。ああ、美しきものは押しなべて、はかないというのが世の常なのでしょう。あの崇高な花も、人に永遠と呼ばれる花々ではなかったのです。長くは咲き続けることのできない一輪の百合でした。この世で名声の一つも得ないうちに王子は天に返されました。王子の死により、ヨーロッパから大いなる希望と大いなる畏敬の念が奪われたのでした。当代きつての名医等が呼び寄せられました。こ

の職業の人々は、かつて診断が一致したことが殆どなく、病氣中の王子の治療法についても意見が対立し、王子が息を引き取った後になっても、論争をやめようとしませんでした。しかしながら意に反し、医者達は、若き王子の肉体の組織になんらかの病巣があり、それで、美わしき魂を長い間この世に引き止めておけなかったと、全員が一致して言わざるを得なくなり、又、王子から、王子の魂が光り輝いていると教えられたことをも、彼等は一致して白状いたしました。当然のことではございますが全宮廷は喪に服し、私も哀惜の念にとらえられ、特にひどく辛い思いをしましたが、これも自然な成行きでございました。

7. 薄幸の小姓が、三日熱にかかった主人の御機嫌をどうやってとったか。

さて、余談はさておき、話を本来の尊敬すべき私の主人に戻さなければなりません、この主人も私に欠かさず好意を示し続けてくれ、私の方も、自分の過ちを許してもらわなければならない時は、主人を頼って行ったのです。私はゆっくり慌てずに、必要な時に、主人を行動に移らせる術を心得ておりました。勉強で進歩をお遂げになり、教師の命にもおとなしく従われることで、あらゆるものを手に入れることがおできになって行くのを、私は日々観察しておりました。それで、その頃は、私のために許しを乞うて貰おうと主人のもとによく仲間をつかわせたもので、その仲間の気立てが良かったことが功を奏し、主人は私を救う為にいろいろ口をきいてくれ、それで私の罪が帳消しになったことがよくありました。しばしば、私は、訴えられている時に人に見られずにその場におりました。私の主人は、一枚のタピスリーの裏側に私をかくまい、その一方で私の悪さを許して貰おうと、好意の限りをつくし、三拝九拝して私の罪に対する正当な処罰をかわしていました。それ程の策略を弄したにもかかわらず、巧みに私の不意をつき、主人も、私の友人である別の王子も、私の処罰を知り得ないことがありました。師はことがうまく運ぶように、私の犯した罪には知らないふりをし、私に罰がくだる日の前日は一日中、私に機嫌の良い顔を見せるのでした。そして、私はといえば、翌朝、良心のやましさを感じていない訳ではありませんでしたが、それでも不意打ちを食ってたたき起こされたものでした。しかし、私の主人が少しでも具合が悪い折には、健康を害しそうなことは何でも由々しき重大なことでしたから、皆はその時期は私を罰するのをためらったものでした。主人の涙を誘発し、それで病を悪化させてはと恐れたからです。従って、主人の病気で私の病も膏肓に入り、大胆不敵になった私はこれみよがしに何にでも挑んでいきました。かつて主人が三日熱にかかったことがありましたが、その間嬉しいことに私は勉強を免除されたばかりではなく、気に入ったことは何でもしてよいという自由を手に入れました。私は病人の気晴らし管理係のようなものになっていたのです。主人を喜ばせ、気分転換をさせるために、私は毎日新たな秘法を考案しましたが、それらは主人の飲んでいた水薬と同じ位、病気の治癒に役だっていたのです。主人は望みさえすれば、それが人間の力の範囲内で出来ることである限り、すぐに満足が得られたのです。そして、私の得た様々な印象を総合すると、主人にあらゆるものを欲しがらせたのは、この私なのでした。

主人の加減の悪い最中はお金が不足することは全くなく、私は主人に一ヶ月でささやかな娯楽費一年分以上の額を使わせました。寝床で気分をまぎらわすためにあらゆる種類の玩具を、タロットだの、棒倒しの棒だの、トリックトラック⁽²¹⁾だの、又、その他宮殿内のちょっとした遊び道具だのを揃えましたが、まるでそれだけでは充分ではなかったかのように、私はその上大枚を投げさせ、値段もまちまちで、ありふれたのやら珍しのやらがいろいろまざった色々な生き物を購入させたのです。私は主人に愛玩用のうずらを欲しいと思わせ、イギリスで行なわれているようにテーブルの上で闘わせてみました、それは主人に見せて楽しませたいと思ったことと、奉行人達が賭をするのを主人に見せようとしたためなのです、奉行人達には予め勝たせると約束しておきましたが。同じ目的で主人は立派な雄鶏を沢山買いました。その次に私はバルバリアの雌鶏を私に買ってやりたいという気持ちを主人におこさせました、目的は羽毛で着飾った隊長達に番いとして与えるためで、彼等の愛の結晶として何か新しい種の家禽が生まれるのが見られるかもしれないと考えたからでした。その後には主人の気晴らしのためにと、大きさも羽毛の色も全く異なるオウム三羽、小猿二匹、大鷲一羽、大変ひとなつこい小熊二頭を買って求めました。その結果、皆からは家が小さなノアの箱舟になってしまったと言われました。奉行人達はひどく腹を立てましたが、それでも私は彼等を住居から追い出し、そこに動物達を住まわせてしまったのです、その動物達には私は高い代金を支払いましたが、主人は私にかかった以上のもっと高い代金を払っていました。と言いますのも、私に賭博のてほどきをした、あの素行の悪い小姓が、私に買物の金をちょろまかすことも教え込んだのです。そういう訳で、私が高価な買物をする時は必ず何ピストルかをかせぎだしたものでしたが、それは一晩ともちませんでした。すぐに賭博仲間と出会い、手に入れたのも簡単なら、奪われるのもそれと同じ位簡単ということになったのでした。

8. 薄幸の小姓の主人が10ピストル支払って買ったにもかかわらず、一声も出さなかったムネアカヒワ

私の主人は毎晩眠れぬ夜を過ごしていました。ひどい虚弱体質だったため、皆もあえて眠り薬を飲ませようとはしませんでした。そのかわりに、人工の泉を用いて優しい音と冷気を部屋にたち込めさせて主人をまどろませ、健康に留意しておりました。又、治療法に変化をもたせるために、リユートを使い、快い調べで同じ効果をあげておりました。これについては、私は、主人に毎朝心地よく眠って貰いたいと思い、別の方法を夢中になって考案しました。私は主人に、ムネアカヒワの素晴らしいのを買い求め、夜明けとともに寝室の窓辺に置いてはどうかと、提案したのです⁽²²⁾。私はかなり図々しくも、とりわけ素敵なのを一羽知っている、とても美しい声で鳴くのだと、主人に申し上げたのです。そして、人は入手が困難であると一層その物が欲しくなり、それを手に入れる為に最大限の努力と出費を惜しまないものだ、ということをよく心得た上で、主人には、所有者がそのムネアカヒワに魅せられてしまっているから、多額の金子を送る一方で御主人様の病気快癒のため必要なのだとも言ってやらない限り、決して売る決心はしませんよ、と申し上げたのです。私は少ない言葉数で多くをなし、その結果、ムネアカヒワを買うための10ピストルを手に入れたのでした。私は急いで誰かそのような

鳥を持っているという噂の立っていきそうな人を捜しましたが、その途中、不幸なことに、大扉の階段で知り合いの小姓が3、4人さいころをしているのと出会ってしまいました。私はしばらくの間、自分では遊ぼうとは思わずに眺めていましたが、遂に誘惑が大変強くなり、忍耐の限界にまで達してしまいました。自分は勝つと信じ、又、勝てなくても少なくともお金が半分なくなったらやめればよいと、思いましたが、結果はその何れにもなりません。私は最初は恐る恐る賭けていたのに、お金を一部すってしまっただけからは、執拗に自分の悪運と闘いたくなくなってしまいました、そして次の掛け金をすってしまうことにもなりました。でっぴあげ話でしかないムネアカヒワの代金のうち、最早手もとには最後の残金を質にして借り受けた $\frac{1}{4}$ エキュ貨2つしかなくなってしまいました。そのため、苦しみで胸ははりさかれんばかりになり、恥ずかしさの余り顔は真っ赤になって、どんな覚悟を決めたら良いかもわからないまま、何処に向かっているかも知らずに街を走って行きました。何の救いにもならないことを次から次へ考えた末、遂に事件解決に向けて決死の覚悟を決め、私を脅かす嵐に立ち向かって行こうと心を決めました。私はすぐに何時もならば小鳥を沢山売っている筈の場所におもむきました。が、ついていないと言ったらありません、小鳥は全然売っていません。取り引きがない日だったという訳でした。ムネアカヒワをどこで手に入れられるかとあちこち尋ねまわったところ、私は、鳥籠を沢山売っているからと、一軒の補獲業者の店に行くようすすめられました。ところが、その業者は不在の上、おかみさんはひどく良心的なのか、ひどく臆病なのか、主人が留守中にはお客に鳥をみせようとさえしないので、私は既の所で絶望する所でした。が、皆が私を今か今かと待ちうけているため、鳥を一羽手際よく入手できるかひどく心配だったところに、ようやくのこと、業者が肩にヒワやホオジロがいっぱい網をしょって戻ってくるのをみかけ、幸運にもその中にかなりきれいなムネアカヒワを探しあてることができました。私はそれを売ってくれるよう頼み、籠も入れて30ソルで手に入れました。すぐに私は家に戻り、心はともかく顔だけは明るく装い、主人の目の前に野生のムネアカヒワを厚かましくも置きました。が、主人は、私とその比類なき生き物を手に入れるのに、多数の困難に打ち勝たなければならなかったことを私から聞かされても、殆ど興味をお示しにはなりません。主人は、その高価な買物によって味わえる筈の楽しみを時を移さず享受しようとし、小鳥が逃げないように寝室の窓を閉めさせ、皆を退出させましたが、小鳥の方は鳥籠の傍に人がいても、網の中に一緒に入れられていたホオジロにくちばしでつつかれた時のようには、驚きはしませんでした。私も持ってきた最初の日に鳥が鳴かなかったことに対しては、簡単に言い訳を見つけることができましたが、2、3日たっても鳥がさえずらないとなると、まわりの者達にはもう私の逃げ口上は通用しなくなりました。それでも天に密かに何度も祈りました、鳥の舌をどうかほぐして下さい。といいますが、私のムネアカヒワがほんのちょっとでもさえずってくれれば、それだけででも少なくとも素晴らしいことと思わせることができたのです、私はさえずったことを褒めちぎろうと心待ちにしていたのです。しかしそんな気休めは得られないまま、私の詐欺行為を覆い隠すこともできず、又、私の主人が小鳥を見ながら

「ねえ、お前、どうしてなの、ムネアカヒワはうんともすんとも言わないよ。」

としか言わなくなったのにある日うんざりしてしまい、私は邪気なく、

「お答えしますよ、小鳥の方だって、さえずらないからと言って、それで良いと思っはけません。」と申しあげました。

私がそう言いますと、一同の者達は笑いだし、この事件では第一の被害者だった私の主人もまわりの人々にならって笑わざるを得なくなりました。楽しく騒いで一段落すると、私にとっては全くあり難くないことでしたが、主人は再び気持ちを騒がせ、小鳥を買うにあたって私が主人をだましたのではないかとお疑いになりました。私はこの攻撃をかなり巧みにかわしながら、相変わらずそのムネアカヒワは優れているから、怯えさえとればそのくちばしで大きな驚異を生み出してくれる筈だと、抗議し続けました。が、運が良かったのでしょう、私が小鳥のかわりになって受け答えをしてやっていると、小鳥の方もたまたま私のかわりにさえずって答えてくれるということがおこり、それで、私をとがめる者達の口が封じられたのでした。私の正真正銘のべてんに主人もひっかかって動揺したものの、すぐに私のみせかけの無邪気さを信じる方に傾いて行ってしまいました。とはいえ、時は真実を暴くの習いといたします、私も毎日に自分の不誠実を思い知り、殆ど苦痛にすらなりだした頃、天の星が私に微笑みかけ、その災難を回避する手立てを私にさずけてくれたのでした。親類のある貴族が⁽²³⁾、ちょうどその頃私に会いに来、とても感じの良い機知と気質が私に備わっているのを認めて、ボム⁽²⁴⁾をするのに役立つようにと2ピストールくれたのです。私は即刻さいころ3つを肥やしにして大変肥沃になっていたゲーム台にそれを蒔いてみたところ、たちまちのうちに、25ピストールだったか、30ピストールだったかにまで成長して行きました。賭をやめるとすぐにためらわずに、私は10ピストール支払って私を待ちうけていた鞭打ちを逃れようという気持ちになりました。その為に、私は私の芝居に役立ってくれそうな役者を捜しに行きました。従僕が志願して来、私は心安らかになろうとして、言うべきこと、なすべきこと全てを、その男に手並み鮮やかに教え込みました。私は自信に満ちた顔つきで主人に会いに行き、もう小鳥がさえずらないと言って心配するに及ばない、小鳥の代金は喜んで返したいと元の持主が言って来ている、その上売った人に小鳥を同じ金額で返してあげることは大きな情けをかけてあげることにもなる、というのも持ち主は鳥を失ったことを非常に後悔し病にふせてしまったのだから、と言ったのです。そう言ってから、私はまだ儲けたてのお金から10ピストール取り出して主人に渡しましたが、何と私達の希望とは虚しいものなのでしょうか、又、何と見せかけとは人を過たせるもののでしょうか、周到に準備したあの会話、あの行為は、当然の不安感から私を解放してくれるどころか、私を一層困惑させることにしかなりませんでした。主人は、私のした話でそれまで忘れていたものを殊の外高く評価し、貴重な品を安い金額で買ったと思い込んでしまいました。誤解をとこうと私が頭を働かせれば働かすほど、主人は自分のムネアカヒワが奇跡のものと執拗に信じ込んでしまうのです。分別があるとは思えない主人の拒み方に私も危うく怒り出すところでした、主人の誤解が私にははっきり理解できていましたし、そもそも種をまいたのは私なのでから。

こんなにもひどくこんがらがってしまった糸をほどいて、私が面目を施したのは、次のような次第です。恐らく11才か12才にしかならない子供が捜しあてたにしては、大変巧妙な思いつきといえたで

しょう。主人にムネアカヒワを手放すよう話をしても埒があかないと思った私は、師の所に行き、私の罪を帳消しにしてくれる筈の10ピストルをさしだして、ムネアカヒワを買い求めた先の人がまたもとに戻して欲しくなって送り返して来たと、師に信じて貰おうとし、同時に、言っていることが師に確信されるようそれらしき顔付きをしました。それだけでもう師の眼中には、王子の承知なしで鳥を取り上げるにあたっての困難さしかなくなりました、師はかなり断固たるところがあり、頭で考えたことはあくまでもやり通そうとしたがるのです。その時、突然女が一人、泣きじゃくりながら、見たところ憑物につかれたようになり、正義と慈悲を求めて我々の所に飛び込んで来ました。それはあるホテルの主人の妻で、亭主の方は無分別な上、大の賭博好きでした。私はいくらかの金子をその男からまきあげましたが、あの時は彼は破産し、5,600エキュを失ったところだったのです。妻は不幸を知った時に、予めどう事を処理すべきか熟慮はしませんでした。が、彼女は賭で儲けた人達のところに行きさえすればお金を取り戻せる、行けばすぐに皆は彼女の所帯のことや、夫の不用心のことを斟酌してくれるだろうと、信じ込んでいたのです。その悪魔のような女は、私が彼女の夫の失ったお金の分け前に与かっていたことを聞き込み、私の師の部屋にやって来てあれ程ひどく騒いだために、私は判断力と言葉を失ってしまったのです。私は、適切な言葉を用いて返答をすることが不可能になったほど、この出来事で困惑しきってしまいました。師は私の狼狽振りに気付き、手の中の10ピストルの出所はそちらではないかと疑いました。しかし、師もその悪魔つきの女に、手の中身を見せるべきではなかったのです、彼女は、大声をあげて飛びかかり、10ピストル分の硬貨を見て一々、彼女の家のお客が支払った硬貨に結びつけたのですから。同時に私は衣服をあらためられました、ポケットから別のコインが出てきたため、又、彼女がそれにあわせて他の話をするのを聞かされることになりました。私が待機させていた従僕は、この騒ぎの場に居合わせましたが、その時なんとかして逃げ出そうと試みました。しかし、止められて下がれなくなり、胴衣を脱がされることになると、全く迷惑千万な話でしたが、真実をありのままに明かしてしまったのです。私が沢山やまを作って書きつないだ筋書きも、この事件でぶちこわしになり、私は情容赦なく鞭で打たれました、買い物の金をかすめたこと、嘘を付いたこと、さいころ3つを使って賭をしたことで。

9. 初めて薄幸の小姓は自由奔放で詩を作る生徒と知りあいになる。

件の事件で私の素行が完全に正された訳では有りませんでした、少なくともお金をかすめ取ったり嘘をついたりする悪さを習慣的にすることはなくなりました。鞭で打たれることよりも、事件で受けた精神的混乱のほうが身にしみて、その後ずっと真面目な態度をくずさず、読書にせいをだしました。人に快いことや誰にも害にならないものに、以後私の頭の回転の早さを用いました。ある時は肖像画を描くことに身を入れました、その種の芸術に心をひどく惹かれましたし、才能も多くありましたので。又、別の折には余暇を利用して、当時評判の大変美しい詩句で書かれたある作品をまるごと暗記したものでした。詩句ならばいくらかでも知っており、もし私がそこに描かれた情熱で燃えたらそうしたと思えるように、身振りをつけ、暗唱したものです。このちょっとした行為が

縁で、多くの人と知り合いになりましたが、その中にはある一座⁽²⁵⁾の役者等も含まれていました、一週間に3、4回来て全宮廷を前に芝居をした人達で、主人も一列目のどこかに陣取っていたものでした。その中に、悲しみと狂乱の演技にかけては評判の役者のいたことが思い出されます。それはそのシーズンのロシウス役者で、彼の語りには秘めやかな魅力があると思われていました。その体つきや顔の美しさ、通る声という点で、彼より秀でていたものの、顔にただよう威厳や知性という点では少々劣るという人物が脇をかためていました。私は二人の俳優が大好きで、時折人知れず恐怖感を抱いた時や、私に対し師が何か悪い徴候を著した時は、彼等のところに逃げて行ったものです。あの役者達は、私の機知と記憶力が並はずれたものだったため、私を大変高く買ってくれたのです。私が彼等のところに行って、困っている、師が私を捜させていると彼等に言うと、私を隠す手段を講じてくれました。そして、芝居をしに行く時は私を王宮と一緒に連れて行き、私の主人が、役者達の用意が出来るのを待ちながら彼等と話を交わそうとして、舞台の後ろを通りかかるや否や、彼等は一団となって、私のために必ず主人に請願してくれました。私の主人は、私を2、3日見かけなくても、悪さをして追われたためと良く承知していましたが、彼等の嘆願にはすぐ心をうたれてしまい、ただちに御自分でも嘆願を一つ師に対してなさってくださいました。すると師も私の赦免を拒否することができなくなってしまったものでした。私はうまく行ったというような言葉を聞くと、それまで隠れていたバス・ヴィオールなどの後ろから素早くでてきて、主人の足もとに身を投げ出し、私のために手にいれてくれたそのあらたな許しに感謝の念を示しました。ある日、私が誰かに拳固をくらわせたくてたまらなくなり、年も力も私と同じ位の如才だけは私が勝っていたある貴族⁽²⁶⁾の鼻を、拳固で少々手荒に殴ってしまった時、私は悲劇役者達のなかに逃げこんでいきました。ちょうど役者達の休演の日にあたっていましたが、休息とは名ばかり、蕩児達は大騒ぎをしてお互いに何を言っているかわからない程でした。彼等は自分達の庭のブドウ棚の下に8人か10人位でいて、部屋着に身をくるんだ若い男の頭と手をつかんでいました。室内ばきやナイトキャップは庭にばらまかれていました。そして若者のまわりに飛びかう野次の声がひどく大きかったために、私は怯えあがってしまいました。忍耐強い若者も苛立っていなかったわけではなく、それは彼の吐く罵詈雑言からわかりましたが、声の調子は大変おどけていて、それを聞いた迫害者達は大笑いしていました。遂に私は、一番所在なげにしていた一人に、その有り様は一体何なのか、皆からそんな風な取り扱いを受けている男は一体何をしたのか、と尋ねてみました。その人は私にそれが一座の座付作者で⁽²⁷⁾、詩興がわきでてきた為ルーレットをやりたがらず、遂に皆に取りおさえられたのだと答えてくれました。そこで私はその悶着をおさめようと首をつっこみ、私に免じてその人を放っておいてあげるよう皆に頼みました。こうして、私はその若者を刑罰から救いました。若者は私が誰だかを知り、又、ナイトキャップやスリッパも返してもらうと、救い主でもあり皆から大変高く評価されていた人物でもある私に挨拶をしにやってきました。彼の言うことは何から何まで途方もないことばかりで、それは誇張でしかなく、まさに学校をでたの自惚れた得意満面の奴の良く吐く言葉そのものでした。しかし、若者のしゃべりまくる奔放さが感じ良く、性格に何か優れたもののあることを示していました。もっと静かに話せるところでと言って、小道に

行きつき⁽²⁸⁾、話を始めるとすぐに彼は一座の為に作った詩句やその他の著作を暗唱してくれましたが、それらには教養というよりも想像力のほうが多く認められました。長い間暗唱を聞いてやっ
てから、私は今世紀最大の作家であるかのような態度で、今思ったことを言ってやりました。又、作
品をほめそやすことで、その田舎くさい詩人が自作に感服するようしむけました。しかし、彼は
私の機知の方に一層感心するふりをし、私の虚栄心をいたくくすぐったので、私も許しを得て家に帰
ったらすぐに、主人のもとで何か彼に役立つことをしてやろうと決心してしまいました。力になろう
という気をかきたてられたのには、二つの動機がありました。一つは彼の気質を評価したこと、
もう一つは、詩を沢山書くには涙ほどの報酬しか得ていないと知り、その不運なめぐりあわせに
同情したことでした。

10. どんな運命により薄幸の小姓が師の手から逃れたか。

私は役者達と大宴会をし、その後も引き続き皆で食卓に残ってそれぞれが健康を祝して飲み続けたり、又、嘘八百を並べて大笑いしていましたが、その時一座の使用人がやってきて、宮廷からおよび
がかかっていると告げました。するとすぐに演ずべき芝居と、宮廷までの私の輸送法がとり決められ
ました。それは四輪馬車のどれか一台の扉の下方に、私を隠すというものでした。そして私達は宮廷
に到着しましたが、馬からおりてすぐ、上に通じる階段を登って行く途中で、この世で最も偉大な大
公の一人⁽²⁹⁾に出会いました。役者達が着いてすぐに私の窮状を私の友人に伝えてくれていたため、そ
のうちの2、3人が大公に私を救ってくれるよう話をしてくれました。そして私は友人達の説得に重
みをつけようと、顔中を涙で濡らして、大公の足もとに身を投げ出したのでした。その偉大な大公は、
私が苦しみ恐怖に囚われているのに哀れみを催し、後ろを振り返っておつきの者達の中に私の主人が
いないかと御覧になりました。私達の師に今回だけは鞭でうたないように強くお命じになろうと
したのです。しかし、私にとっては運の悪いことに、そこには私の主人の姿は無く、体が少々不調だ
ったために芝居にはいらっしやらなかったのです。芝居がはねてから、私は大公の就寝前の接
見に助けをもとめて参りましたが、大公は許しをとりつけるまでの間、私の身の保全を考え御自分の
小姓の一人に私を預けて下さいました。それは身分が高く、勇敢で誉れ高い家系の出の貴族⁽³⁰⁾でした。
誇り高かったために仲間全体から恐れられていたその少年が、私を自分の守護下に置いてくれたので
した。私はと申しますと、その小姓の外套の端をつかみ、それを一時たりとも放しませんでした、
それが私の気にも入っていたのです。翌朝、小姓は私を食事に連れて行き、その後日中はずっといろ
いろな気晴らしをして過ごしました。その間、私は片時も小姓のそばを離れませんでした。私は家の
誰かをみかけるとすぐに身を守るために外套の中に隠れていました。

夜になると、私の護衛は衛兵の部屋で、大公の将校二人とともにいくらのお金をもとに賭をしよ
うと思いつきました。私は、そのカード切りの立会人及び判定者をしていたところを不意に、敵、つ
まりは私の罪の裁き手に捕らえられてしまいました。ひどく手荒につかまれたため、師は私の罪を裁く
ばかりではなく死刑執行人にまでもなりたくなかったのかと思いました。不意を打たれ、私は恐怖からか、

敬意からか、大声をあげる勇気も力もでないでいました。しかし、恐れつつも私はおぼれかかった人間の常で、攔んだ手は決してゆるめず、力をこめて両手の中にあつた外套の裾をひっぱりました。私の護衛は、賭に夢中で私が連れ去られそうなには気付かないでいましたが、遂に誰かが外套を剥ぎ取ろうとしていると気が付きました。そこで彼は振り返り、王家で盗みをはたらこうという不埒な振舞におよぶ盗人が誰かを見極めようとしたところ、目に入ったのは窮地に陥つた私の姿だったため、恐るべきやり方で私の救出にとりかかりました。彼は殆ど物も言わず、又、何の素振りもみせないで、激しい性格のために別のやり方で自己を表現することができないまま、師に拳固の大きなのを歯をめがけて一発くらわせて、私が安全な隠れ家にいるのだということを思い知らせました。小姓の腕っぶしは強いのに、師の顎は脆弱だったため、口の中は砕けてめちやくちゃになってしまいました。師は攔んでいた私の手を放さざるを得なくなり、その両の手を、顔に雨と降り出した拳固の攻撃をかかわすのに用いなければならなくなりました。遂に大公の衛兵が中にわって入り、私はカンカンになって怒る師をそこに置き去りにして、護衛とともに退却しました。師の方は口をすすいだものの、歯が一本折れ、別の何かかもぐらぐらになって、痛さの余りうめき声をあげていました。

11. 薄幸の小姓とその師の間にうちたてられた偽装平和

翌日、師は私の主人とともに大公に会いに来、師の受けた手酷い取扱に対し苦言を呈しました。が、こちら側ではすでにその事件について報告を済ませていました。それも、師の振舞を暴力だと決めつけた報告をしたために、大公は師が被害をうけた暴力に関しては余り考慮しませんでした。師が私をいくら弾劾してみても全く無駄で、私を許すよう命じる絶対権力には従わざるを得ませんでした。しかし、師は、その正当なる権力の威光に屈するふりをしたにしても、当然持っていた敵意までも実際にしづめてはしませんでした。師が大公の小姓のひどい乱暴に対し私に罰を与えるため、何か新たな口実を探そうとやっきになっていた折も折に、これからお話するような機会が到来したのです。

件の一座の座付作家は、私が許しを得て主人のもとに戻つたと聞き、約束通りに私に会いにやってきましたので、私は作家が私の主人に挨拶の出来るよう取り計らってやりました。喜んで私は作家を主人にひきあわせたのです。作家は光栄にも主人と半時話をかわし、王子を称える四行の詩句を直ちに作って何がしかの施し物を受けることにまでなりました。こんな詩です。

私は詩のなかで、かくも美しき王子様に
おびただしいほどの讚美を捧げます。
それらは天使の宮殿を飛びかいます、
墓場から免れて。

これらの詩句に欠点はありませんが、はっきりそれを指摘することは私達もできませんでした。ただ単に、彼がピレネー山脈あたりで作りおいていた誇張的な表現を感じ良いと思っただけでした。この詩人が私の主人に暇乞いを告げた時、どんなふうにして自分の話に交えるのを常としていた何か淫らな言葉を不用意に口にしたのかわかりません。師はそれを人づてで知り、私が原因で受けた侮

辱に対する仕返しを、それを口実にしてやってやろうとしました。翌朝、師は私のところに不意に訪れて来、新しい人を紹介する際には慎重を期さなければならない、と叱責し、見知らぬ不品行な男を主人にひきあわせた私の向こうみずを、強く非難しました。が、師は説教を終えると私を延々と鞭で打ち続けたので、私は終わるのを心待ちにする気力もなくなってしまうほどでした。私には簡単にわかりましたが、あの処罰は淫らな言葉が私の主人の汚れなき耳を傷つけたことに由来するのではなく、私の師の歯を拳固で折った無謀な行為から出ているのです。

12. どんな訳で薄幸の小姓は立派なオードの批評を頼まれたか。

前述のような厳しい叱責のために私はその後はひどく控え目になっていましたが、だからといって詩全般への好みや、最も美しい詩句の蒐集への熱意を失ったわけではありませんでした。我々の家には大変立派な紳士である侍臣がおりましたが、この人は記念すべきいくつかの戦いに加わっていたため、又、そつがなく良識のある人であったために皆から重んじられていました。私のことをいくら評価し好意を示してくれ、時折私達の師の授業と同じ位価値のある忠告を与えてくれました。従って私の方はその人との友情を保つことはとてもたやすいことで、ただ尊敬の念を表明し、その人と会話をし、楽しみを味わっているだけで良いのでした。その人は話を心地よげにしてくれました。そして楽しい出来事を詳しく語る術を良く心得ていたのも、それを人から聞くのも又、大きな喜びとしていました。そういう次第で、私は機会を見つけては素晴らしい詩を新しく覚え、すぐにその人の所に暗唱しに行きました。私の主人付きだったある若い御膳部役人はしばしば私が詩行を暗唱するのを聞こうと近寄ってきたものでした。そして私が口で唱えているのを聞いて、自分でも一編位は、その時悩んでいたある恋愛をもとに作れるだろうと思いきや、おそらく彼は、愛はあらゆる科学を支配するもので、どんな重い動物でも飛ばすことさえできるのだと、人が言うのを聞いていたのでもありましょう。

ある日侍臣と私が話をしている時のこと、侍臣が良いと思った詩一編を或る詩集に探していると、件の恋する役人がそとやってきて私の腕をひっぱり、小声で耳元に私にみせたいオードがある、決して出来は悪くないからとささやくのです。私が作者の名を尋ねても教えてくれず、ただそれはかなり機知にとんだ青年で、現在リネン管理係の女性の娘に恋をしているところだと言っただけでした。そしてそう言って、紙を一枚広げてみせましたが、私にはなにがそこに書かれているかさっぱりわかりませんでした。文字は奇妙に書きなぐられていて不均衡な上、うまくつながれていず、要するに全く書く術を知らない人間の筆跡でした。侍臣は、その秘密の隠しごとがなんであるか私に尋ね、自分も仲間に加えてもらえるかどうかと尋ねてきました。

私は侍臣に答えました、それは詩句なのだけれど、謎のようで、解説が大変難しいのだと。すると、若い役人は、文字も詩も本当は自分で書いたのですが、侍臣を安心させようとし、その筆跡を大変良く知っている、その詩を聞きたいならばきちんと読んでさしあげましょう、と言うのでした。そしてすぐに行動に移り、青くなったり赤くなったりしてからようやく口を開き、遂に自分のオード

を読みあげましたが、そこには次の四行の詩句しかありませんでした。

私の名誉，私の名誉，
あなたに私は心を捧げました。
私は生涯変わらず
あなたの僕となりましょう。

四行の詩句の最後を読み終わると、彼は大仰にお辞儀をしましたが、それはまるで朗読も上品であるし、振舞も礼節にかなっているだろうと言いたげでした。そして我々に語り聞かせたばかりの小オードについて評を求め、賞賛してもらいたいばかりに、その著者に才気があるという評判のあることまでつけ加えるのでした。それを聞くと、侍臣と私の二人はお互いにみつめあい大爆笑してしまったため、隣室にいた他の廷臣が3、4人、何で笑っているのか確かめに飛んで来るほどでした。15分の間抱腹絶倒し、一言も言葉を発することができないでいた後、ようやく私は、そんなにひどく笑ったのは、彼等の仲間の一人が我々に見せてくれた大変洗練された詩のせいなのだ、彼等に知らせてやることができました。しかし事態はずっと傑作なことになりました、彼等のうちの一人から聞いた話なのですが、件の恋する廷臣は地下室に二昼夜こもり、あの立派な作品を清書すべく、熱心に字を書く練習をしていたというのです。

13. どんないきさつで薄幸の小姓が別の小姓を代理とし、自分のかわりに鞭の罰を受けさせたか。

風はどんな海にあっても最後には嵐にかき乱されてしまうものです。私も長きに渡っておとなしくしていることは殆どなく、必ずや何時もの激情で波乱を引きおこしてしまうのでした。私には賭博癖があり、何時もそれで私はひどい目にあってきました。というのも私は賭をやめることもできなければ、間違いをおこさずにやり続けることもできなかったからです。又、他方では、小説を読むうちに私の気質は高慢で不寛容になってしまいました。私が仲間とちょっとした口論をした折などは、強引にでもすべて言い負かさなければすまない気持ちになってしまい、ホメロスの主人公の一人にでも、それでなければ少なくともシャルルマーニュの騎士か、円卓の騎士にでもなったつもりになってしまいました。私が与えた拳固に対し、師の耳に達した苦情はそれこそ毎日ありましたが、それにしても師にとって耐え難かったのは私を罰する自由裁量権を持たなかったことで、私を助けるのに賛成する強力な意見があったことがその原因であり、その意見も私が皆に持つよう働きかけた結果のものでした。ある日のこと、師はコルドリエ会の神父様と話をしているうちに、その修道院では時折手のつけようのない振る舞いに及ぶ少年達に説教をし、しつけをするという慈善を施していて、その治療法で少年達の悪しき習慣がしばしばなおっていると聞き知りました。師は、腹を立てることもなく、主人に介入されることもなく、私を罰することのできる便利な方法を見つけ大喜びしました。神父様のところに送りこみたい悪童がいる、その子供には神父様のところのような説教が必要なのだ、とあらかじめ伝えておいて、師は私が重大な過失をするのを今か今かと待ちました。そして神父様と交友のあることを出来る限り巧妙に隠し、翌朝の11時頃、封印された手紙を神父様あてに届けるよう言い付けました。私はその素敵

な仕事をもらって大喜びしました、それはそこいらを歩き回る自由を得られたからで、1時間位は大丈夫だろうと思いました。そして宮殿の大階段を下りて行ったところ、ポケットの中の何枚かのテストン銀貨⁽⁸¹⁾が邪魔になり、それで通りがかりに賭をしてみたくなってしまいました。そんな僅かなお金で儲けられようとは夢にも思いませんでしたので、有り金全部いっぺんに賭けました。すると、何時もならば運は、私をついている人といない人の中間に置こうとするのに、その時ばかりは私に好意的な風を装うのでした。またたく間に私は大きな勝ちを収めてしまい、賭の金が殆ど私のところに集まって来てしまったのです。ちょうどその時、頼まれていた用事を思い出したので、私は渡すよと言いつかっていた手紙をみせながら、退散すると言いました。しかし賭の仲間で一番ついていなかった者が、擦ってしまってもかまわない金いくらかと指輪をいくつか持っていて、私に勝負をやめなideくれとひどくせがむため、私はその願いを受け入れました、尤もその間に私の用事を代りにやってくれる人を探してからという条件をつけましたが。折よく、剣をもった少年がその大したことのない仕事を進んで引き受けてくれ、大急ぎで義務をはたしてくれると私に約束してくれました、テストン銀貨を後であげるという約束付きでしたが。私は、彼への報酬がいかなる危険にもさらされないように、すぐに銀貨を第三者にあずけてしまいました。

その少年は自身の悪霊に導かれて、急ぎ用事にとりかかりましたが、しかし行き先で私と取り違えられました。少年は恐ろしい呪詛と瀆神の言葉を吐き、鞭打ちされることになっているのは別の人間だと、相手を説得しようとしたのですが、それを聞いた修道院長上は、手に負えないその少年こそが、大変身分の高い人から彼の手に乗ねられた少年に違いないという当初に持った確信を、ただ強めるばかりでした。私がお手紙の件でいらいらし、又賭も終わろうとしている時になって、ようやくのこと、その少年が血の気の失せた顔をして戻って来るのをみつけました。私はあの手紙がなくなってしまったのだと思い、彼が顔色を失っているのは事故が起こったためと考えました。が、少年は私を長い間誤解させたままにしてはおかず、強力な拳固を何発も私にあびせかけ、取り乱してみえるのは怒っているためだと、私に教えました。そこにいた人達は私達の間に割って入りましたが、少年が出来事のあらましを語り終えると、彼が私のためにやってくれた不快な使い走りのお礼として半ピストールを、与えるよう命じました。

私の方は、そんな安あがりな方法で鞭の罰からのがれられたことに大喜びしながら、手紙の返事を渡すために家に戻り、師を捜しました。私は神父様がよろしく言っていたということ以外は何も口にせず、又、それを言うのにも悲しげにずっと目を伏せたままでやったため、その結果、師は自分の計画が成功したと見極め、思わずほくそえんでいたのです。そして、師がコルドリエ会の神父様と再び会い、私が大の瀆神者であると神父様から言われるまでその思い込みの誤りは解かれませんでした、師は私が神を冒瀆するのを耳にしたことがなかったため、それを信じるができなかったのです。しかし、私を神父様に対面させたところから、その面白おかしい話が明るみにでることとなりました。

14. 薄幸の小姓はどういう風にして魔法使いと取り違えられたか。

そのような危難をのがれてからというもの私は自分の行動にひどく慎重になり、師の怒りをかきたてるものになること、主人の大切な姿から少しでも私を離す原因となることはすべて放棄すると、改悛宣言をしました。最早主人の勉強や遊びに熱心に加わることにしか、情熱を燃やしませんでした。主人の頭脳は面白いものなら何にでも興味を持ったため、御自分で最も良いと判断された話や物語を、私が熱意をこめてお話ししました。時折、本を買って来いという内緒のいっつけをなさることがありましたが、それは私が一人でこっそり読んだ後、主人が夜お休みになる時にお話してさしあげるためのものでした。ある日、沢山あった話の本からたまたま『自然の魔法』という題のバティスト・ポルタの本をとりだし、ページをあけたところ、そこにちょっとした課題が記されていて面白そうだったため、いくつかを実際にやってみようと思いたち、その本を買いました。自分の仕えている若き王子にはその本については秘密にしておき、師がいなくなった時になって私達はこっそり全章を読み、そしてどんな愉快的工夫をすれば、費用も難しさも一番少なくして実行に移せるかを確かめてみたものでした。その本には参加者全員の顔を動物の顔にみせるというあるろうそくの作り方がのっていましたが、その調合は少々難しそうに思えました。それよりも同じ種類で別の仕掛けを実験してみたくなりました、そちらの方が容易にそれも費用が少なくてできそうでしたので。それはカンフルと硫黄をブランデーに溶かした混合物で、燃やすと死者のような顔を現出させる筈でした。その素晴らしいランプのショーを私達がやろうとしていたことは、私の仲間一人だけにしか知らせず、私は十分に時間を費やして、予め購入しておいた薬物を密かに主人のベッドの下に運びました。夜、私達の企てを実行に移すのにちょうど良い時が来ると、主人は眠りたいと言って皆を退出させました。寝室に最早三人しかいなくなると私は銀製のたらいをとりに行き、用意した可燃材でランプを作りました。そして、その場の中央に私は死者の炎を灯し、燭台の火は全部消しました。

主人はすぐにベッドから抜けでてき、魔法の炎の美しい輪郭を観察しましたが、しかし私達には、顔は殆ど見分けられませんでした、煙が黒くたちこめていたのです。うす暗い光のそばにずっと近付かなければなりませんでした。片側に主人がビロードの四角いクッションに座り、反対側には私達がひざまづいて、青白く、時折紫色になる顔を注視していました。この楽しい観察を始めてさほど時間はたっていませんでした、私達は背後に小さな物音を聞いたのです。それはまるで私達が座っているごさを、何かを押しているような感じでした。主人が真先に振り返りましたが、そこに今までの私達の顔よりもっと醜く、奇妙なものを被った、見慣れない顔を見てしまったのです。三人ともそれを目にしたとたん、大声をあげましたが、主人は恐ろしさの余り気絶してしまいました。

その恐ろしげな亡霊は私達の師でした。人造の炎の出すむかつくような悪臭が、師の寝室にまでおりて行ったため、それがなんだか確かめに来たのです。師は現場で私達をとりおさえようと音もたてずに近寄ってきました、首には風邪の予防のために布切をまきつけ、赤い夜着を着て、頭にはナイトキャップを被ってです、その御老体は日中はかつらをつけているので、それで髪の毛の無いところが皆にばれてしまいました。師はこれから寝床に入ろうとする老人の身なりをしていたのです。

主人はそのような師の姿をみたことがなく、不自然な光で顔が蒼白に見えたことも重なって、恐怖の余り、危うく命を落とすところでした。気質に繊細さがもう少し欠けていた私と仲間の二人も、床の上で氷ようになって、身動きがとれなくなっていました。私達の師はひどく大きな物音をたてたので、次の間にいた従者達が駆けつけてきました。彼等が持ってきた明かりで、王子が気を失っていること、仲間と私の二人とも決して気分が優れているわけではないこと、が、わかりました。大変な大騒ぎとなりました、それはとても筆で書きあらわせるものではありません。叫びと涙と嘆き声だけになってしまったのです。召使のうちの誰かが、たまたま以前にみかけた私の本の一冊の背に、魔法と記されていたのを思いだし、私がそこで何か悪魔払いでもして、事故を起こしたのだと言いました。その結果、家の全員が今にも私に飛びかかり、八つ裂きにでもしかねない様子でした。しかし、主人がそう長くはかからずに正気にお戻りになり、その事故について真実を語り、私を身の危険から救い出してくれました。しかし、主人が何と言いつてくれようとも、皆は私を有罪とし、無邪気な悪戯のために20回以上も鞭で打たれたのでした。

15. どうして薄幸の小姓は料理人に向かって、恐怖を与えられたからと、7回も剣を振ったのか、第一回目の失踪はどんなだったか。

二週間というもの皆が私が魔法を使ったと言う話でもちきりで、各人が自分で理解した範囲内で意見を述べあっていました。一番賢い人々は私の調合の成功よりもその意図の方を重視して、少しは私の若さを容赦してくれました。しかし、無知なる輩は私の過ちを誇張し、取るに足らないことを針小棒大に言うのでした。その中でも特に頭の弱い料理人がいて、時々気がおかしくなると噂されていましたが、その男が、皆に不安感を与えたことで私に仕返しをするため、私を恐怖に陥れてやりたいと思いました。ある夜、私の主人が2、3日田舎にでかけて留守をし、又、私も早くから床に入り、一日中ボームをして体を使った後の疲れをいやそうとした時のことでした、その料理に狂った親方は、胴衣の上に白いシャツを着、血のしみを全体に点々とつけました。その上、頭にはナフキンをターバンにして被り、まわりには家禽の羽を沢山さしたのです。次に、まだ燃えている薪を口でくわえ、私のベットまで寄って来、カーテンを引いて、私をじっと見つめたのです。私はまだうとうととしていただけでしたので、料理人もそれ程手こずらずに私のまぶたを開かせることができました。私は幽霊を見るや否や、逆上し我を忘れてしまい、今ここでその時のことをうまくお話することができそうにない程です。一体どんな大胆さと怒りが私の激しい恐怖にまざりあったかわかりません。が、私は素早く自分の剣にとびつき、恐怖を抱かすその姿にむかって、突撃したのです。剣を振り回しながらその姿を扉のところまで押し戻しましたが、その時それが言葉を吐いているのはわかっても、その内容までは全くわかっていませんでした。もしそれが、階段の上から下へ転がり降りて行ったのでなければ、もっと丁寧な敬意を表していたことでしょうに。直ちに人が大勢、松明を持って私の部屋にあがってきました。そして、私が手に抜き身を持ったまま恐怖の余り真っ青になっているのに気づき、私に自分で何をしたと思っているかを尋ねたのです。私は答えま

した、寝室に現われ私を苦しめた亡霊を追い払ったのだと。そうすると、皆は私が6回剣を振った相手は、家の料理人で、そのために瀕死の状態に陥っていると明かしてくれました。私はその知らせでどれ程驚愕したか、私を待ち受けている処罰のイメージが第二の亡霊となって、どんなにその晩中私をおびえあがらせたかは、あなたにはおわかりいただけないでしょう。翌日、夜明けとともに、私は身繕いをして逃げ出しました、主人に連れ添って田舎に行った師を除いては、家には私に手をかける権限を持つ人はおりませんでしたから、誰も私を捕らえはしないと確信していましたのに。私は、それまでかなり軽い過失に対してもひどく鞭で打たれていましたので、そんな風にして男を一人殺してしまったら、もっとずっと激しく鞭で打たれるだろうと思い込んでしまったのです。そう想像すると、私は恐慌をきたしました。宮殿をでると走りだし、10~12里程行くまで走りやめませんでした。しかし、私はのぼせていましたし、あふれる程の元気がありましたので、その道のりを猛烈な勢いで進んでしまい、ある村の一軒の家にとどり着いた時には、もう足がバラバラになってしまいそうな状態でした。足にできたまめのために、もうそれ以上歩き進むこともかなわず、4、5日、そこにとどまりました。

私は決心しました、故国に戻り⁶²⁾、鞭打ちがもう問題にされない位充分に大きくなるまで、宮廷には戻るまいと。しかし、その家を出ようとしたところ、驚いたことに、昔、私の祖父の召使いをしていた老人がやって来るのに気付いたのです。大変慎重なその男は、私を捜すよう言いつかった後、道々随分入念に私を探索した結果、遂に私がどこにいるのかつきとめたのです。男は私の持っていた恐怖心を取り除いた後、その恐怖心は間違っていると言明し、たとえ一介の料理人よりもはるかに誠実なその男を、今こんな風にして出会ったとたん殺してしまっても、私はとがめられはしないのだと、誓って言うのでした。私は男の言っていることを一部は信じましたが、相手の目をより一層うまく欺くために、全てを信じたふりをしました。そのお人好しは、自分の馬を私に譲ろうと思って別にもう一頭自分用にあちこち探し回りましたが、みつけることができず、そのため、そのちょっとした旅程を徒歩で私について来なくてはならなくなりました。が、男は60歳に近く、2、3里歩くと疲れてしまいました。それを見て私は、男と別れたいと思った時すぐに別れられる方法というものを考えつきました。そこで私は、少し歩けたら嬉しい、馬の鞍があわなくて座り心地が悪くなって来た、と言いました。お人好しの爺さんは簡単に承知して上に乗り、それ以降は、ちょうど良い時をみはからって、爺さんを乗せたり歩かせたりしました。町まで一里しかないと言うところで、そして私の先導者が大変疲れて来た時に、私は歩かせて欲しいと言いましたが、それには爺さんも快く同意しました。そこで私は少し歩いて前に出て行きました、その間爺さんの方は鐙を自分の位置に調整しなおしていました。走るのに邪魔になるので、私は予めオーバーを預けておきましたが、それはまた、オーバーを鞍の枠にくくりつけるので爺さんに時間を沢山とらせるためでもありました。それらすべてのおかげで私は爺さんよりずっと先へ進むことができました。まめはもう痛まず、足にも再び自信が持てるようになりました。その時、私は街道からそれました、そして、畑を横切って突進し、猛スピードで走り、またたく間に爺さんの視界から姿を消してしまいました、爺さんにとって、私

は、犬がまだ毛を引き抜いただけなのに捕らえたつもりになっている野兎だったのです。あの年若い召使は、家に私を連れて戻れると信じていたのに、私のオーバーだけしか持ち帰れなかったのです。

(以下次号)

〔註〕

- (1) *Le Page disgracié*. I部1642年10月28日, II部1642年11月5日刷了, 1643年に『薄幸の小姓, あらゆる体質, あらゆる職業の人間のありのままの性格を見る。』の題のもとに出版される。1667年に弟のジャン＝バティスト・レルミット Jean-Baptiste l'Hermiteが解釈の鍵をつけて再版。訳にあたっては, 1643年のオリジナル版を用いたセロワ, SERROY, Jean (Presse Universitaires de Grenoble, 1980) の版を使用。
- (2) Tristan l'Hermite, 1601(?)~1655.
 - 1601(?) マルシュ地方, スリエ(ソリエ)城で生まれる。
 - 1604 母方の祖母に連れられてパリに出る。
アンリ四世の私生児アンリ・ド・ブルボン Henri de Bourbonの小姓となる。
 - 1621 ルイ十三世の弟ガストン・ドルレアン Gaston d'Orléans に仕える。
アルディ Hardy, ファレ Faret, サン＝タマン Saint-Amant, テオフィール Théophileとの親交を深める。
 - 1627-28 ガストン・ドルレアンに従いラ・ロシュルの攻囲に参加。『海』*la Mer*を執筆, 処女詩集となる。肺結核発病, これは快癒。
 - 1632-34 ガストン・ドルレアンとともにロレーヌ地方を旅する。
詩集『アカントの嘆き』*Plaintes d'Acante*を出版(1633, Anvers)
英国に渡る。
 - 1634-38 パリに戻る。ガストン・ドルレアンの家にはすぐに戻らず, モデーヌ Modene 家, ナンセー Nançay 伯, サン＝テニャン Saint-Aignan 伯の庇護を受ける。
 - 1636 悲劇『マリアンヌ』*Marianne*を上演, 出版1637.
 - 1637-38 悲劇『パンテ』*Panthée*を上演, 出版1639.
 - 1638 詩集『恋愛』*les Amours* 出版。
 - 1640 ガストン・ドルレアン家に戻る。
 - 1641 詩集『豎琴』*la Lyre* 出版。
 - 1642 『書簡集』*les Lettres mêlées* 出版。
 - 1642頃 ガストン・ドルレアン家を出る。
 - 1642 悲喜劇『賢者の錯乱』*la Folie du Sage*を上演, 出版1645.
 - 1643 『薄幸の小姓』*Le Page disgracié* 出版。

- 1643-44 悲劇『セネカの死』 *la Mort de Sénèque* を上演，出版1645.
- 1644 悲劇『クリスピの死』 *la Mort de Chrispe* を上演，出版1645.
- 1646-47 悲劇『オスマン』 *Osman* の上演，出版1656.
- 1646 『聖母のための祈り』 *l'Office de la Sainte Vierge* 出版。
- 1646 ギーズ Guise 家に入る。
- 1648 『英雄詩集』 *les Vers héroïques* 出版。
- 1649 アカデミーの会員になる。
- 1652 田園劇『アマリリス』 *Amarillis* を上演，出版1653.
- 1653 喜劇『居候』 *le Parasite* を上演，出版1654.
- 1655 肺病が悪化，キリスト教徒として9月7日死去。
- (3) 誰にあたるか不明。1667年版に付されたジャン＝バティストによる登場人物関係の詳細な注（『薄幸の小姓』のI部に関しての注と考察, *Remarques et observations sur le premier livre du Page disgracié* セロワ版 p. 211-216）にも記載のないことから，ティラントはトリスタン自身という解釈もうまれる。
- (4) モンテーニュ
- (5) 終生メランコリーを歌い続けたトリスタンは自己の存在に深い哀しみを感じていた。この部分はトリスタンの真情が吐露されたものと考えられる。
- (6) トリスタンの自叙伝としてテキストを解読できる部分は確かに多い。しかし，ここでトリスタンは波乱万丈の青春を描くことにより，読者に小説を読む楽しみを提供したいと欲している。セロワは『薄幸の小姓』の序文で，シャルル・ソレル Charles Sorel が『薄幸の小姓』をロマン コミックに分類していること，又，気晴らしに有効な小説の一例としていること，を指摘している。なお，自叙伝も小説（roman）も当時としては，新しいジャンルだったことには注目しておく必要がある。
- (7) ソリエ（スリエ）城主ピエール・レルミット Pierre l'Hermitte とエリザベート・ミロン Elisabeth Miron の子供。マルシュ地方の旧家。
- (8) ゲレの重臣殺害事件で，伯父二人の共犯として4年間投獄されていた。ユミエール Humière 侯爵，ガブリエル・デストレ Gabrielle d'Estrée（アンリ四世の寵姫），ピエール・ミロン Pierre Miron（後，トリスタンの父の舅となる人）の働きかけで救われた。
- (9) ブリグィユ子爵ルイ・ド・クルヴァン Louis de Crevan Vicomte de Brigueil（ジャン＝バティストの註による。）
- (10) ガブリエル・デストレ
- (11) ピエール・ミロン クラマイユ Cramail 男爵。
- (12) 1643年版のテキストによると，読点の関係から「経済状態の悪さを知らなかったにもかかわらず，話をまとめるのは難しくなかった」という解釈も可能。（原註による）

- (13) ドゥニーズ・ド・サン＝プレ, Denise de Saint-Prest
- (14) シャルル・ミロン Charles Miron, アンジェ司教。リヨン大司教, リヨン伯。トリスタンの伯父。
- (15) アンリ四世 (ジャン＝バティストの注による)
- (16) フランソワ・ミロン Francois Miron
- (17) アンリ四世とその私生児アンリ・ド・ヴェルヌイユ Henri de Verneuil
- (18) クロード・デュ・ポン Claude du Pont, トリスタンの伯父の教師をつとめ, 後, ルイ十三世の弟ガストン・ドルレアンの師となる。
- (19) トリスタンの主人アンリ・ド・ヴェルヌイユのいとこ, レオン・ディリエ Leon D'llliers
- (20) オルレアン公, Duc d'Orléans
- (21) 西洋双六
- (22) 当時, 生き物を飼うのがはやっていた。
- (23) 父方の親戚。ド・ラ・ロシュマスノン De la Rochemassenon 閣下。
- (24) 球戯。テニスの前身。
- (25) オテル・ド・ブルゴーニュ座。当時の人気俳優とは, ヴォトレ Vautret とヴァルラン Valleran
- (26) シャルル・ド・ションペール, アルワン伯 Charles de Schomberg, Duc d'Alluin
- (27) ジャン＝バティストの註により長い間アルディと信じられてきたが, リガル Rigal がテオフィールであることを証明した。ピレネーあたりに滞在したことがあって誇張癖のあるのは, パリっ子アルディよりもガスコーニュ生まれのテオフィールである可能性が強い (次章参照)。テオフィールは1590年生まれで, 1610年にはパリに来ていた。1613年から15年まで芝居を書いていたと推測されている。又, 役者のヴォトレがオテル・ト・ブルゴーニュ座の名簿に始めてのつたのは, 1613年であり, 1613年11月24日付けのマレルブ Malherbe の手紙によると, オテル・ド・ブルゴーニュ座は, その頃宮廷に何日間か呼ばれている。
- (28) 1667年版は「(…) 小道に行きつき,」の後以下のように終わる。
「(…) 薄暗い小道に行き着くと, 彼はすっかり私を信頼し, 喜劇について持っていたあるテーマを私に教えてくれました。そして, 決して他言してくれるなと私に頼むのです。それは話を知った誰かが書くのを邪魔するのではないかと恐れたからでした。彼は私の手を握りながらこう話してくれました「僕等の仕事に口出しをしてくるあいつら役者連は, 他人の名誉を全くうまく横取りし, 何のためらいもなく, 自分の所有していないものを自分のものとし, これみよがしに自慢するんですよ。まだ2日とたっちゃあいない, 名前は言いませんがね, ある奴は仲間を前にして何編かの作品を朗読して, 確かに拍手喝采をあげたんですがね, 名声をもっと大きなものにしようとしたんですかねえ, それだけでは満足しない。皆のお世辞でのぼせあがってしまい, 僕の作ったソネまで朗読してしまったんですよ。そこに僕の友人が一人いて, 僕が何度もそれを暗唱するのを聞いていたから, そのソネがそいつのものではないと, 又, 本当の作者を知っていると伝えてくれたのですよ。その男はそれでひどく怒り, すんでのところで取っ組

みあいのけんかになるどころでしたが、仲間達が僕の友人の言うことは信じないとそいつに態度で示し、引きとめたんです。」私達は会話をもっと先まで進めて行きましたが、途中で、ルーレットが終わった役者達の一人にさえぎられました。他の役者達もすぐに私達に加わり、みなそれまで何を話していたか知りたがるのでした。その日の残りの時間は気晴らしをして楽しみ、夜になって皆と別れました。

- (29) アンリ四世
- (30) シャルル・ド・ラジィ Charles de Razilly
- (31) ルイ十二世治下で鑄造され、ルイ十三世の時代まで使用された。(原註)
- (32) 1667年版では「(…)故国に戻るか、」の後に、「あるいはスペインにでも行き、国の要職についていて、私をそばにおいておきかっている親類のもとにいて、」が挿入されている。このスペインの親類についてジャン＝バティストは、その一人一人を紹介し、詳細で長い註をつけている。

註を作成するにあたり、中に記した資料の他に以下のものも参照した。

1. Bernardin : *Un Précurseur de Racine, Tristan l' Hermite, sieur du Solier, sa famille, sa vie et ses oeuvres*. Slatkene Reprints 1967.
2. Amédée Carriat : *Tristan l' Hermite, sa vie et son oeuvre*. Guéret Imprimerie Lecante & Les Presses du Massif Central, 1972.
3. Jacques Schérer : *La dramaturgie classique en France*. Nizet 1973.